



明治大学 黒耀石研究センター ニューズレター

No.17

September 2022

Center for Obsidian and Lithic Studies Newsletter

研究の現場から

縄文時代中期柝倉式土器の胎土分析

信州は縄文時代中期の遺跡が多く、出土する土器装飾も非常に複雑であり、かつ在地土器に異系統の土器が共存することが多い。だが、そもそも在地土器はどこでどのような単位で作られるのだろうか。そして土器型式内の類似性や広域的な斉一性の背景にはどのような仕組みがあるのだろうか。

これら具体的な土器づくりのシステムの追求をめざして、土器製作仮説を掲げ、個別例の分析を通じてその検証を進めてきた^{*1}。基礎研究として通時的な在地胎土の有無の確認のため、千曲市屋代遺跡群の縄文・弥生・古墳時代から中世までの焼き物の胎土分析研究を実施し、縄文時代と弥生時代以降の大きな胎土の転換を確認した^{*2}。

令和元年度からは科学研究費基盤研究（C）「胎土分析から復元する縄文時代中期の土器づくりシステム」（代表：水沢、分担者：中村由克）により、分析対象を拡大している。まずは、柝倉式土器が出土する遺跡を取り上げ、1遺跡内で同時期の土器間（同一型式間・異型式間）にどの程度の胎土の共通性および差があるのか、そして複数の遺跡間の同一土器型式間に胎土の共通性が見られるかどうか等の確認を目指す。

柝倉式は中越地方から北信に分布し、縄文時代中期中葉から後葉への転換期を象徴する特徴的な土器群である。東北地方の大木式土器と中央高地の唐草文系土器との関係を物語る点も注目されている。そこで中野市千田遺跡の調査では^{*3}、柝倉式前夜のS B16、柝倉式古段階のS B37、柝倉式新段階のS B25の3軒の住居跡出土土器合計101点を対象に、ルーペ観察による素分類を



エポキシ樹脂による土器の修復

目次 Contents

- * 縄文時代中期柝倉式土器の胎土分析 …………… 1
- * 群馬地域の配石墓（石棺墓）の研究 …………… 2
- * 箱根山の黒耀石と朝日・弁天山遺跡 …………… 3
- * 新任客員研究員の挨拶（大竹憲昭氏） …………… 3
- * 島田和高氏が日本旧石器学会賞を受賞 …………… 4
- * 2022年度の研究会等予定 …………… 4

行い、「代表資料」26点を抽出した。「代表資料」は、図版非掲載土器を中心に、新たに写真撮影・採拓による図化を行った上で、土器表面1cm×1cm四方の岩石・鉱物の実体顕微鏡によるカウント（中村氏が担当）と、土器表面から断面方向へ約0.5cm×2cmの岩石・鉱物の偏光顕微鏡観察用の薄片化を行った。特に、薄片化のためにサンプリングをした箇所には、拓本と写真を参考にエポキシ樹脂を補填し、元の形に修復している^{*4}（写真）。

まだ概観段階ではあるが、柝倉式土器の胎土は古段階・新段階ともに岩石では流紋岩、鉱物では石英を多く含むものが多く、胎土が定型化していることが分かる。一方、柝倉式成立以前の胎土はそれらとは大きく異なり、土器ごとの差異が大きく、地域が限定される特徴的な鉱物も含まれているようである。これは柝倉式成立前夜には、中央高地や北陸地方からの人びとの多様な動きに伴って、土器が搬入され、柝倉式が成立した後は、在地での土器製作が優勢になり、同一の原料土や技術によって量産されたことを意味するのかもしれない。今後、これらの土器の粘土部分を蛍光X線分析して、これまでに得られた砂部分の胎土分析の結果と対比したいと考える。

千田遺跡の立地が千曲川河岸である背景には、各地との交易・交流が予想されてきた。千田遺跡もしくはその周辺から他集落へ搬出された柝倉式が実際に存在するかどうか、今年度はさらに分析対象地域を広げつつ、比較検討を進めていきたい。（水沢 教子）

註

- *1・*2：水沢教子2014『縄文社会における土器の移動と交流』雄山閣
- *3：中野市立博物館および土屋 積前館長にご協力をいただいた。
- *4：分析資料の破片化や散逸を防ぐためにも必要である。土器採拓には柴田洋孝氏、修復には加藤周子氏のご協力をいただいている。

参考文献

綿田弘実編2013『千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その1—千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター他

群馬地域の配石墓（石棺墓）の研究

現在研究継続中の科研費基盤研究（C）「縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究」（課題番号19K01002）の一環として、群馬地域の後期の配石墓（石棺墓）についての研究を行っている。

配石墓の研究は1995年に「配石墓と環状列石」（大工原・林 1995）を発表したの嚆矢としている。この論文では、配石墓が東北北部を起源としたもので、新潟・長野ルートで群馬地域へ伝播したことを明らかにした。その後も継続的に配石墓の研究を行い、2017年には「関東地方北部における配石墓(石棺墓)の出現と展開」（大工原 2017）により、分布・構築時期・形態と変遷・上部施設と下部施設・配石墓群の構造などについて瞥見した。この中で、配石墓は北関東では群馬地域にほぼ限られ、渡良瀬川以東の地域には分布しないことについて言及した。

また、これに先立ち2011年に、群馬・栃木地域の後・晩期の黒曜石を収集し、蛍光X分析を実施し（建石他 2011）、栃木地域では信州産（小深沢・星ヶ塔）に加え高原山産・神津島産が一定量流通しているのに対し、群馬地域ではほぼ信州産に限られており、渡良瀬川が流通の境界となっていることを解明した（大工原 2011）。

こうした先行研究により、縄文時代後・晩期においては、渡良瀬川が情報伝達と流通の境界になっており、その歴史的・社会的要因を明らかにすることが、本科研事業の目的の一つとなっている。

なお、配石墓について瞥見した前稿では、紙幅の都合で詳細について、十分説明しきれなかったため、群馬地域の配石墓について再度詳細に分析を行い、「群馬地域における配石墓（石棺墓）の形態と変遷」（大工原 2022）としてまとめた。本稿では、群馬地域の配石墓（石棺墓）として24遺跡36墓群326基を認定した。

まず、配石墓出現前夜（後期初頭～前葉：称名寺式期～堀之内1式期）では土器副葬・土器被覆葬が特徴的であること、配石墓の形態、配石墓の型式・形態の変遷について検討した。そして、

これらを9形態に分類し、それぞれの形態の変遷を明らかにし、型式設定を行った（図1）。配石墓の変遷は次のとおりである。

堀之内2式期はまだ従前の墓制との折衷様であり、土器副葬・土器供献が認められる。そのため、配石墓の出現時期を特定することができる。この時期には青森地域から伝播した水上型（伸展葬）、敷石住居の構築技術である横積み（しやくじ）を多用した野ヶ久保型（伸展葬）と梅木平型（屈葬）、小形の赤子型（屈葬）が併存している。その後、加曽利B1式期になると神奈川地域から伝播した両端型（伸展葬）が加わるが、梅木平型と野ヶ久保型は造られなくなる。

そして、加曽利B2式期になると、比較的大形の石川原型（底面石敷）と、大道型（石敷なし）が出現し、明確なグレード差が存在するようになり、階層化が進展したことが分かる。

こまではすべて単一回埋葬用の配石墓であったが、加曽利B2式期中頃以降には、配石墓の階層化がさらに進展し、再葬用の配石墓が最上位とした墓制が山間部を中心に発達する。再葬用の大形配石墓としては、深沢型（底面石敷）と瀧沢型（石敷なし）が存在する。この型式の配石墓は一次葬用（土葬・火葬）として繰り返し使用され、二次葬用としては土器棺再葬墓と集石再葬墓が用いられるようになる。

晩期前葉になると再葬用配石墓は利用され続けるが、後期に盛行した単葬用の配石墓は途絶える。それに代わり両端型から発展した上部に礫充填配石を伴う土壌墓が出現する。この時期になると土器供献が再開するようになる。

以上のように、後期における配石墓の変遷と階層化の進展について明らかにすることができた。しかし、本論においては各時期の配石墓群の構造について、検討することができなかった。配石墓の存在する渡良瀬川以西の地域と、存在しない以東の地域の墓制を検討することにより、墓制からみた文化圏の違いを明らかにしていく予定である。

（大工原 豊）

文献

大工原 豊 2022「群馬地域における配石墓（石棺墓）の形態と変遷」『利根川』44

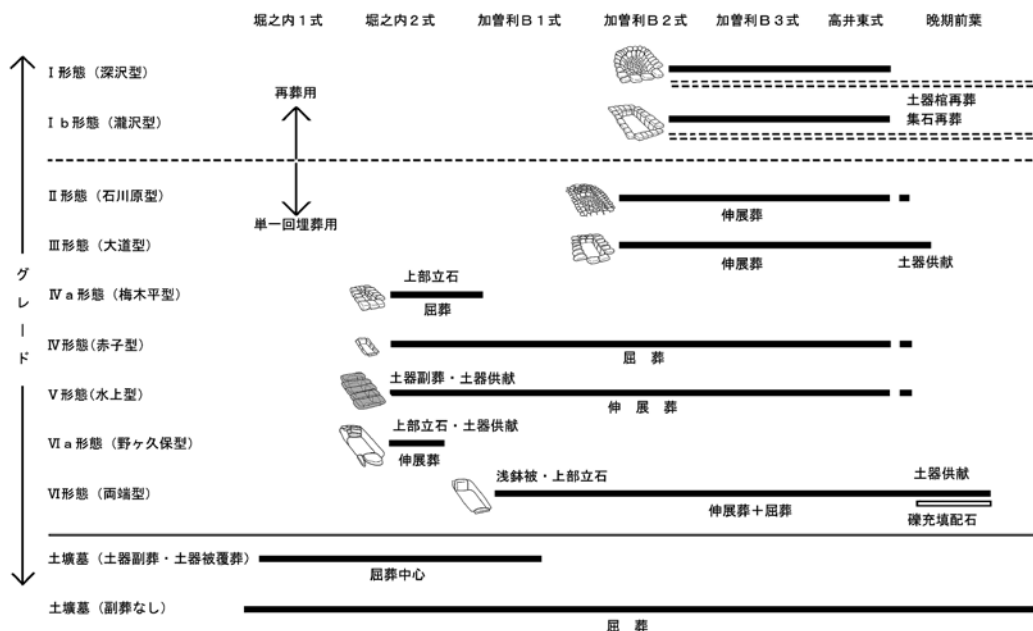


図1 群馬地域の配石墓の変遷

箱根山の黒曜石と朝日・弁天山遺跡

朝日・弁天山遺跡は、箱根産黒曜石原産地である芦之湯や畑宿に近接する旧石器時代遺跡で、1961年に立正大学考古学研究室と芦刈研究会による発掘調査が行われ、黒曜石製のナイフ形石器などが出土している。神奈川県下では、1957年の横浜市本郷遺跡に次いで、2例目となる旧石器時代の発掘調査が行われた学史的な遺跡である。

私は、立正大学在学中の3年生の時、考古学実習でこの遺跡から出土したナイフ形石器を実測する機会があった。数点あった黒曜石製のナイフ形石器は、すべて白い斑晶が目立つ漆黒のもので、これが箱根産黒曜石なのかと初めて意識したことを覚えている。

さて、朝日・弁天山遺跡は、1961年『朝日新聞』朝刊に連載された獅子文六の小説『箱根山』に登場する遺跡として話題になった遺跡である。立正大学の坂詰秀一先生の回顧によると小説に登場する主人公のモデルとなった松坂康氏（芦之湯・松坂屋旅館主・芦刈研究会主宰）らによって、旅館の隣接地で採集された石器を当時、東京大学講師の芹沢長介先生とともに松坂屋旅館で観察したという（坂詰1967）。

そして、1961年11月に松坂康氏が主宰する芦刈研究会と立正大学考古学研究室の共同で発掘調査が実施された。調査は、わずか4日間であったが、ローム層中から100点余りの石器の出土と自然石が並ぶ配石の検出に成功した。学生時代に実見した石器は、黒曜石製で幅広の縦長剥片を素材とした二側縁加工ナイフ形石器などで、何点かは打面が残置するものが認められた。そのナイフ形石器は、大和市深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層のいわゆる「ティア・ドロップ形」のナイフ形石器に類似するもので、今日では、相模野段階Ⅶ石器群に位置づけられるものである（諏訪間2019）。

そして、注目すべきは、東西1.2mの長さに5点の安山岩質の自然石が1列に並ぶ配石（石列）の存在で、石器群は配石の北側にのみ出土することである。この配石と石器の出土状況は、ほぼ同時期の相模原市田名向原遺跡の住居状遺構などの人為的な遺構の可能性を彷彿させる。

朝日・弁天山遺跡は、調査から60年が経過しているが、改めて注目し、黒曜石の産地推定や配石の評価などの検討する機会を得たいと考えている。（諏訪間 順）



写真1 発掘地に建つ石碑「朝日ヶ丘 旧石器遺跡」
中曽根康弘元 首相の揮毫による遺跡名と石碑の下に出土石器が埋め込まれている（撮影 渡部 行雄氏）

文献

坂詰秀一1967「芦ノ湯の旧石器時代遺跡」『箱根町史』第1巻
諏訪間順2019『相模野台地の旧石器考古学』新泉社

新任客員研究員の挨拶（大竹 憲昭氏）

信州黒曜石原産地と遺跡に向き合って

東京生まれの私にとって、信州の黒曜石原産地とそれにまつわる遺跡は、あこがれの地であり、その地に最初に足を踏み入れたのは1978年の大学1年生の時であった。当時下諏訪駅と上諏訪駅から上田駅を結ぶ路線バスがあった。下諏訪駅からは和田峠を越え、河川流域に分布する男女倉遺跡群を、上諏訪駅からは大門峠を越え、大門街道追分バス停で下車し、湿地を取り囲む鷹山遺跡群を訪れた。この対照的な二つの原産地遺跡のうち、男女倉遺跡は当時新和田トンネル建設に伴う発掘調査が終わった直後であった。和田峠を越え、上田方面に和田川沿いに下り、男女倉集落から流れる男女倉川との合流地点が男女倉口というバス停で下車し、男女倉川に沿ってさかのぼると、畑には一面に黒曜石がちらばっており、太陽光に反射してキラキラ光って見えた。鷹山遺跡も同様で、いつしか剥片などは手に取ることもなく、ポイントばかりに関心が向かっていた。原産地遺跡を実感した。

1984年原産地直下の遺跡である長和町大門鷹山地籍にスキー場の建設計画がもちあがった。その場所は当時の鷹山遺跡第1地点に相当するため、団長森嶋稔氏、顧問戸沢充則氏、調査員として院生の須藤隆司、齊藤幸恵の両名とともに10月5日からの調査に乗り込んだ。標高1300mを越える高地には11月には雪も降るといふ。ただ原産地とはいえ調査対象面積は約1,000㎡、なんとか1ヶ月内には終わることができると考えていた。しかし現地入りすると、事業用地は10,000㎡、駐車場やレストハウスなどで削平される面積も3,400㎡と3倍以上に増えていた。表土を剥いで見ると、案の定、原産地遺跡である為に粗密はあるものの全面から遺物が出土、この時点でとても1か月では終了できないことが明らかとなった。早速、戸沢調査団顧問同席のもと、長和町（旧長門町）教育委員会教育長北澤貞利氏（のちの町長）と調整会議をもった。結果、町当局も遺跡の重要性を考慮して、大幅な設計変更をして遺跡の主要部分は保存となった。

ここでもう一つ重要な展開があった。戸沢顧問から遺跡群の重要性に鑑み1箇所のブロックを学術的に調査するよう指示されたのであった。その結果、約300㎡の規模のブロックを精査し約7,000点の資料を検出した。これが第Ⅰ遺跡M地点である。1989年に刊行された『鷹山遺跡群Ⅰ』の中で戸沢氏は「この調査は、(中略)初めて鷹山遺跡群における面的な発掘が行われ、多量の原石・石核や素材としての刃器や剥片の集中遺存の状態を明らかにすることに成功して、鷹山遺跡群が黒曜石原産地遺跡群であることを、改めて具体的に認識させる画期的なもの」と評している（前掲書）。

この鷹山遺跡の調査が、信州黒曜石原産地との本格的な付き合いの端緒であり、人生を変えたといっても過言ではない。翌1985年、私は長野県埋蔵文化財センターに就職した。

就職した私は、県内各地の発掘調査や県庁での本務のかたわら、1986・87年に実施された鷹山遺跡の分布と範囲の確認、黒

耀石の産出地と原石採集地点の確定、鷹山盆地の古地形復元を目的とした遺跡群の総合的かつ組織的な詳細分布調査に参加した。1991年からは鷹山盆地の周辺部である山林の調査が開始され、その後の星箕峠の縄文時代黒耀石採掘址群の発見へとつながっていく。そして2000年には明治大学黒耀石研究センターがこの鷹山の地に設置されることとなった。こうした長和町の調査に参加させてもらうと共に、幸運なことに1989年からの3年間は、旧和田村内の和田峠周辺や男女倉地籍の分布調査と原産地周辺の遺跡調査にも参加することができた。

埋蔵文化財センターの業務では、同僚であり大学の後輩でもある岡村秀雄氏、鶴田典昭氏、谷和隆氏らと信濃町野尻湖遺跡群や飯田市竹佐中原遺跡等の発掘調査、報告書刊行に携わった。野尻湖遺跡群は黒耀石原産地からみれば消費地のような遺跡であった、調査により旧石器時代における黒耀石利用の変遷を垣間見ることができた。一方竹佐中原遺跡は日本列島における黒耀石使用開始以前の石器文化で、竹佐中原 I 石器文化の解明は黒耀石という資源がどのように列島の旧石器人に発見され、利用されていくのかという問題にも直結すると考えている。

鷹山第 I 遺跡 M 地点の調査から40年近くの歳月が経とうとしている。まだまだ研究の課題はある。本研究センターの推進課題「ヒト-資源環境系研究」を、私は、信州黒耀石原産地と遺跡-その構造研究-として研究を推し進めていきたいと思っている。

(大竹 憲昭)



1984年の鷹山第 I 遺跡 M 地点の調査

島田和高氏が日本旧石器学会賞を受賞

2022年6月4日・5日、名古屋大学東山キャンパスにおいて日本旧石器学会が開催され、本センター員として長らく研究活動を推進協力されてきた島田和高氏に2021年度「日本旧石器学会賞」が授与されました。同賞は、旧石器研究の発展に貢献し、優れた業績を挙げた学会員に与えられるもので、島田氏が進められてきた旧石器時代研究が高く評価されたものです。

特に近年、島田氏は黒耀石から先史時代の列島人類史を究明する考古学、古環境復元に取り組みされており、化学分析の分野からなる学際研究の推進も期待されたものと言えるでしょう。今回の島田氏の受賞は、当研究センターの研究活動に関する評価にも結びつくものであり、共に喜びたいと思います(栗島)。

2022年度の研究会等予定

■シンポジウム 「検証：サピエンス日本列島への道」

客員研究員の堤氏が採択されている科研基盤研究Cに関わる研究会が、下記の予定で開催されます。申し込みは事前予約であり、定員制限がありますので早めの予約をお勧めします。

○日時：2022年10月22日(土) 午後1時～

「中央高地信州におけるサピエンスの足跡をたどる：最新の旧石器調査研究から」

○場所：長野県伊那市いなっせ (定員70名)

<http://www.inasse.jp/index.html>

○日時：2022年10月23日(日) 午前10時～

「検証：サピエンス日本列島への到来」

○場所：長野県伊那市創造館 (定員70名)

<http://www.inasse.jp/index.html>

■シンポジウム「ヒスイ・コハク—先史社会を彩る貴石—(仮)」

○日時：2022年12月10日(土) 午前10時～

○場所：明治大学グローバルフロント2F (4021教室)

縄文時代の前期以後に多量化・多様化する装身具について、特にヒスイとコハクという原産地が限定された資料を対象とした研究会を開催します。

今回の研究会では特に原産地に於けるヒスイ・コハクの産状を地質学的見地から分析・紹介し、縄文人が資源としてそれらの石材をどのように開発したのか、生産・流通も交えて多角的視点からの検討を行います。詳細については後日、当センターのホームページでも紹介します。尚、本研究会は日本玉文化学会(会長：藤田富士夫)との共催事業にも位置付けられています。

〈編集後記〉

春以後、一旦は休息に向かうかにも見えた新型コロナウイルスですが、夏前から第7波に見舞われ、感染が身近に迫った脅威であることを再認識しました。皆さんと現場・研究会で心置きなく議論・検討できる日が、来年こそは訪れることを心待ちにしております(栗島)。

明治大学黒耀石研究センターニュースレター 第17号

発行日：2022年9月30日

編集・発行：明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8

電話：0268-41-8815

黒耀石研究センター猿楽町研究室

〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3

電話：03-3296-4424

URL:<http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷：中澤印刷株式会社

〒386-0002 長野県上田市住吉1-6

電話：0268-22-0126



*当センターでは施設の固有名称として「黒耀石」の表記を使用しています。